

### (3) 自閉スペクトラム症児をもつ母親グループへの支援の検討

#### —TEACCHの考えを応用して—

川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科医療福祉学専攻修士課程

○村松 幸代

川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科

諏訪 利明, 下田

茜, 小田桐早苗

【目的】自閉スペクトラム症（以下 ASD）をもつ子どもは一見ただけでは分かりにくい困難さを有しており、このことが母親の養育行動の難しさの理由の一つになっている。本研究では、知的障害を伴わない ASD 児のグループ活動を実践した上で、並行して TEACCH の考えに基づいた母親指導グループを実施した経過を通して、母親がどう変化したのかを捉え、母親支援のあり方について検討する。

【方法】知的障害を伴わない ASD 児の小学1年生 6人を対象児、その母親 6人を対象者とする。対象者には、療育開始前と療育終了後に研究者と同様の質問紙に記入をお願いし、合わせて半構造化インタビューを実施する。質問紙は、子どもの行動やスキルに関する34項目を5件法でチェックする。その得点を実施前後で比較し、変化の方向性を明確にするために研究者のつけた得点とも比較して考察する。また、対象者のインタビューの答え方の変化を質的に捉え、これらの変化の経過から母親支援の方法について検討する。

【結果】質問紙の療育開始前と終了後の得点は、子ども自身の特徴やスキルに注目した項目のいくつかが変化していた。得点の変化の結果は、療育終了後

の平均値が開始前の点数より「上がった」が4人、「低くなった」が1人、「変化なし」が1人であった。これらの数値はいずれも検査者がつけた点数と比較すると高い数値だった。また、対象者の半構造化インタビューの内容を整理した結果、22のカテゴリに分けられた。そのうち対象者6人に共通するカテゴリとしては、[診断]、[特性]、[子どもの姿の親の受け止め]、[工夫していること]の4つがあげられた。前後での発言内容を比較する中で共通にみられる変化としては、より子どもの[特性]を理解した答え方になり、[子どもの姿]と[工夫]は具体的な答え方に変化していた。

【考察】質問紙から、母親の子どもの行動に対する捉え方や気持ちが変わったこと。インタビューから、母親自身が自分の子育てを振り返り、ASDの特性による子どもの行動を誤解していたことに気づくことになったと考えられる。このことは、母親グループの支援として、同じ立場の母親がともに時間を過ごし、子育ての問題の共有を図ることで、個人の子どもの問題への具体的な焦点化につながるようになったと言える。